

坂元彦太郎先生を偲んで

村山 英子

去る二月四日、坂元彦太郎先生が亡くなられた。

昨年は、「卒寿を迎えます」というお年賀状をいただき、ご長命をうれしく思ったのに、淋しいことである。

坂元先生は、岡山大学から、お茶の水女子大学の附属小学校の校長になられ、間もなく、附属幼稚園の園長を兼任された。幼稚園も小学校も、大学のキャンパスの内に隣り合わせにあるので、近くはあったが、毎日両方の間を往き来ならねばならぬ

お忙しさの中、よく保育室や園庭に立ち寄られた。

当時、幼稚園は、菊池ふじの先生が教頭で、坂元・菊池時代が始まったわけであるが、私の長い教師生活の中で、この時代が一番幸せだった気がする。

言ってみれば、父親と母親が揃って健在で、大きな傘の下で守られているという感じなのである。

しかし、このお二人の関係も、初めからスムーズであったわけではないようで、菊池先生は、「いつも懐に辞表を入れているよ」と、笑いながらも半

分本気で、おっしゃっていらしたし、私も、"親父とおふくろが、仲良くしてくださいと、娘たちが困ります。"などと、冗談まじりに申し上げたりした。ご聡明なお二人は、直に気持ちを通じ合わせられたのか、一歳年上の菊池先生を、冗談に"お姉ちゃま"などと呼ばれて、和やかな、よい雰囲気を作られた。

坂元先生は、よく保育室や園庭にみえられて、子どもたちと触れ合われたし、子どもたちも、園長先生が好きで、よくまつわりついたりしたが、先生は、カメラを持って、子どもたちの生活を撮っていらっしやることも多かった。保育者が園長先生の目をあまり気にしないでもすむように、という配慮もありだったのかとも思う。これらの写真は、附属幼稚園の九十周年の記念出版として、『お茶の水大附属幼稚園の生活―目でみる教育課程―』にまとめられているが、幼稚園の生活の様々な場面が、温かい目で写し出されている。

先生は、個々の子どもも、温かく見守ってくださった。三年保育のA子は、"早くおべんとうにならない"といっっては怒って部屋から出ていったり、帰りに"先頭になれない"といっっては並ばずに廊下にしやがみこんで怒っていたが、卒業の頃には、笑顔のよい、実心のびのびした子どもになっていた。先生は、その三年間をじっと見ていてくださって「あの子は、とてもよい子になりましたね」とおっしゃってくださいました。保育者にとって、これ以上の喜びはなく、うれしい思いが今でもはっきり残っている。

毎年、子どもたちの卒業アルバムに、園長先生の"お言葉"として短い文章が載せられるが、坂元先生の"お言葉"に次のような文がある。

幼稚園の庭には

なにか とくべつなおいがしていた
なにか とくべつな草がはえていた

とかげや ばったの

怪獣のようなのが いたし

ともだちも

チューリップや ばらの花のような

かおを していた

幼稚園の 思い出には

なにか 特別な においがする

坂元先生は、幼稚園のにおいを感じとられ愛された、数少ない園長先生のお一人でいらしたと、今しみじみ思う。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)

坂元彦太郎先生を偲んで

立川 多恵子

平成七年二月四日の夕方、坂元彦太郎先生が亡く

なられた。私たちとしてはとても残念なことであるが、先生にとっては久しぶりに奥様に会える嬉しい

旅への門出なのかもしれない。

奥様が亡くなられたのは丁度一年前である。私は奥様の御葬儀の日、先生のお寂しさを察して、葬儀